

JICA
ボシニア
タイア
千葉

SV ニュース
 第 4 号

第三回定例会開催

第三回定例会が平成十七年十二月十日(土) 十時より「ぱるるプラザ千葉」で開催されました。出席会員三十四名、来賓五名計三十九名でした。冒頭に品川会長の挨拶があり、続いて来賓による講演が催されました。



品川会長挨拶

講演者および演題は次のとおりです。

- ・山口公章 JICA 東京センター所長
- 「JICA とボランティア事業」
- ・渡邊和佐 千葉県総合企画部国際政策室副主査
- 「千葉県の国際化について」

(各講演要旨は2頁に掲載) 引き続き来賓と新会員の紹介と挨拶が行われました。来賓は次の方々でした。

- ・田辺光宏氏 (SV 経験を活かす会常任議長役)
- ・玉城均氏 (JOCV 千葉 OB 会広報担当)
- ・大山美砂子氏 (JICA 千葉県国際協力推進員)

新会員の氏名などは本会報第5頁を参照ください。ひきつづき懇談会に入り参加者全員が三グループにわかれ自由に意見交換を行いました。



懇談会風景

なお司会は黒田副会長、書記に上村實、北垣勝之両氏があたりました。

二〇〇六年度総会案内
 日時 五月二十七日(土)
 午前十時〜正午
 引き続き懇親会予定
 会場 ぱるるプラザ千葉

定例会終了後、会場一階のレストランで懇親会を行ない、さらに話が盛り上がりました。

【特別寄稿】

県国際交流センターから
 千葉県国際交流センター長 大橋孝一氏

当センターは本県における民間国際交流・協力団体の活動の中心となる機関として、在住外国人の支援等を通じ多文化共生社会の実現に参画すると共に、県レベルでの国際協力・貢献の推進を図っているところであり、これらの活動のなかで本県の JICA シニアボランティアの皆様には日頃から大変ご協力を戴いているところでございます。

当センターが推進する諸外国への協力や交流、また多文化共生の活動を一層充実させるため、今後とも市町村協会をはじめ各方面の民間団体にご支援をお願いする所存です。引き続きシニアの皆様におかれましても、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

春暖の候、会員の皆様には益々ご清栄のことと推察します。当会は二〇〇三年七月の発足以来三年目を迎え、会員数も発足時の約三〇名が六八名と倍増したことは同慶の至りです。

発足当時を振り返ってみますと、JICA シニア海外ボランティアとしての活動を終えた人達が帰国後、お互いの連絡がなく、折角の活動経験を何ら活かす機会なく残念な気持ちを持っていました。

発足3年を振り返って

会長 品川洋之助

このように JICA の千葉県内での活動への協力を軸として千葉県海外技術研修員受入への支援活動、JOCV 千葉 OB 会との連携活動など活動の幅を広げてきました。

当会の存在意義については次のように考えます。

- ① JICA 海外ボランティア活動に関する情報ネットワークとしての機能
- ② JICA シニアボランティア同士との親睦・連帯
- ③ 千葉県を基盤とする地域ボランティア活動

一方会務として、通常総会、定例会、月例役員会、国際交流会への参加など、役員・会員のボランティア活動で運営しております。

JICA シニアボランティアとして触発されたボランティア精神をますます発展させ、活動を通じた知識の拡張、また連帯・親睦を深めることで自らを高め、生きがいとするのが出来そうです。

今後とも全員参加で我々にふさわしいボランティア活動を続けたいと思います。

JICAとボランティア事業
JICA東京所長
山口公章氏



JICAでは延べ十二年間三回にわたるパラグアイ勤務の後、現在は東京センター所長として市民参加協力事業(ボランティア活動など)に積極的に携わっております。緒方貞子理事長のもとJICAが進めてきた国内外事業改革に触れながらお話をいたします。

ター通称JICA地球広場として市民連携協力関連事業や各種ボランティア事業を一括して行えるようにしました。また海外研修員八千名のうち半分の四千名は広尾で受け入れるようになります。これにより、事業運営の向上が期待されます。

また、青年協力隊、シニアボランティア、日系社会ボランティアのボランティア事業が上手く機能するには、プログラム・アプローチ(課題対応)の必要性が指摘されています。特に教育とか保健などの事業がそれに該当しますが、そのためには他の技術協力事業や有償資金協力とも連携しながら進めることが必要です。さらにボランティアの意義との関連も出てきます。

つまり個々の活動の「やり方」や「達成度」を規定していくと、「自由度」が落ちるという問題です。例えば中南米で行われている寄生虫対策事業の場合、地域の人々とのように取り組んでいくか、ただ単に公衆衛生の問題に止まらず、そこには初等教育を含めた学校や地域社会との関係が生じてきます。

最後に、先日開催された「S<経験を活かす会」でも述べたことですが、皆さんには、「さあこれからどうするか」と悩む五十七〜八歳位の

年配者で、ボランティアをやりたいという人たちへのアドバイザーになっていただきたい。そういう人たちの「道しるべ」になって大いに語って欲しいと思います。

以上、個人的な考え方も交えながらJICAの現状についてお話をさせていただきました。

千葉県の国際化について

千葉県総合企画部
企画調整課国際政策室
副主査 渡邊和佐氏



今年も海外技術研修員七名が九月二十二日に来日し、約三ヶ月間、県内で

研修を実施いたしました。貴会の皆様には研修員への日本語指導や生活面におけるカウンセラーとしてご協力いただきなど、研修期間を通して大変お世話になりましたことに、心より御礼申し上げます。さて、本日は千葉の国際化についてご説明させていただきます。

千葉県では、年度ごとの行動計画である「アクションプラン」を二〇〇二年から策定しており、本日はその二〇〇五年版の内容に沿ってご説明

させていただきます。

今日、人や物、情報は国を越えて直接世界とつながる時代になっていきます。このような状況からあらゆる県民生活の分野において「ゆるぎない世界の中の千葉」を創造することが求められています。

そのために、①世界と交流し世界へ貢献する千葉県づくり、②外国籍県民にも住みやすい千葉県づくり、③世界へ通用する国際人の育成、④国際競争力を高める戦略的環境整備、の四本の柱により、「国際化」をキーワードとして県民の力、地域の力が一層増大していくことを目指しています。

それぞれの具体例を申し上げますと、今年度、県の有する人材や資源・技術などを用いた国際協力モデル事業をベトナムにおいて実施する予定です。また、かずさDNA研究所とアメリカ・ウイスコンシン州プロメガス社との共同研究の調印がなされました。民間団体の「千葉ウイスコンシン協会」を主体としたウイスコンシン州との交流やドイツ・デュッセルドルフ市との交流も始まっています。これらの交流を更に推進することにより「世界の中の千葉」の確立を目指しています。

県内外外国人登録者数は着実に増えていきます。その数は今日およそ十万人になります。

それにとめない在在外国人への日本語教育や、多言語での医療、情報、住宅等の情報提供の検討を進めています。

また、世界に通用する国際人の育成については、国際理解教育やインターナショナル・スクールの整備に向けて検討を進めているところであります。

国際競争力を高める戦略については、海外の活力を生かした産業の国際的な展開や外資系企業の誘致促進を図っています。

以上、これら四本の柱を関係施策と連携しながら推進しているところであります。

最後に千葉の国際協力の取組を少し具体的に説明させていただきますと、今回のベトナムにおける生活環境改善事業は、NGOや国際機関との連携を検討しています。内容は下水道、廃棄物、ごみ処理などの分野における環境教育となっており、本県の有するノウハウを活用できる国際協力活動となっております。

皆様方の中には、これらの分野をご専門にしている方もいらっしゃると思います。今後も、多くの経験やノウハウをお持ちの皆様にはご協力をいただながら、事業を進めていきたいと考えています。

会員寄稿

ニカラグアから帰国後の一年

齋藤富貴子
(ブラジル日系/ニカラグアSV (随伴))

二〇〇二年にニカラグアへSVとして派遣された夫と共に、〇四年十一月に帰国しました。私自身の前任国のブラジルでは日本語教師として日系社会でお手伝いをさせていただき、昨年は平成十七年度秋SV募集の千葉会場の説明会にパネリストとして参加し、皆さまにブラジルやニカラグアでの体験を少しでもお伝えできたことを嬉しく思っております。

海外では日本が平和を愛し世界一安全な国と言って誇りを持って活動して参りましたが、最近十年間における日本社会の変容には驚くばかりです。犯罪者の低年齢化、そして凶悪な殺人事件やモラルの低下による事件が多発し、日本が平和で住みやすい素晴らしい国家であると世界に胸を張り断言することがはばかれ



る状況になつてきました。自由な行動と豊かな物質を手に入

れることが許される社会の半面、人と人との信頼感が遠のいて家族の絆も薄れていくなど心の安らぎや拠り所をなくす人も増えているようです。さらに日常生活の便利さが増すに従い行動もマニュアル化され次第に自己判断力を失っていく場面を見ることも多く、心の貧しさが目立つ世の中になっていきました。

最近ではニート族や子供たちの携帯電話のインターネット利用による事件など大きな社会問題を抱えています。これら様々な問題発生の根底には、私たちが利益追求の経済至上主義に流され、自己中心主義に溺れた社会と全体における道徳観念の低下があると思われました。

ブラジルでは日系社会の方々が日本語学校を設立し、長年日本語を通して日本文化を子孫に継承したいと強く望み、日々努力を重ねている姿を拝見し尊敬してまいりました。

今年には千葉県JICAシニア海外ボランティアの会の充実とさらなる発展を期待いたしておられますと共に、この問題に関心をお持ちの会員のご協力を頂いて、子供たちのために住みやすかった日本を私たちの時代に取り戻せるように、具体的な指標と活動内容を検討していくことができたらと願っています。海外の活動で与えていただ

いた経験を活かしながら国内では明るい社会や日本人としてのアイデンティティを維持していくためのボランティア活動を継続できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

Viva Mexico！日墨交流四百年、友好国メキシコ

田辺光宏(メキシコ)

メキシコの南東端、ユカタン半島のクインタナロー州チェトマル市にある放送局チャンネル七で番組制作の指導をしました。州内には海洋リゾート・カンクンがあり、隣のマヤ遺跡のある熱帯雨林Siun Kaan(マヤ語で「空の生まれる所」)にNHKのBS特集「世界自然遺産を行く」の取材班が来ました。放送権を譲り受けスペイン語に吹き変えて放送。地元でも未だ知られていない秘境をメキシコの人々に紹介しました。

次に、成人の七十%が肥満である為、番組「肥満と健康」を制作、一年間繰り返し放送しました。



メキシコとの交流を高めたいと考

え、明治三十年榎本武揚が計画した中南米で初めての「榎本開拓団」の百年後の姿を「日本人開拓村は今・・・」で紹介し、「メキシコの野口英世」では、ユカタンの州都メリダのオーラン病院に英世の銅像があり、アフリカで亡くなった英世の黄熱病研究が、メキシコにあった事を知り、今でも語り草になっている彼の研究ぶりと業績を伝えました。

私の故郷・九十九里町に近い御宿町と仙台市がアカプルコと友好都市になっております。江戸の初め、台風で遭難した三隻のメキシコ船の百十二人を御宿の漁民が助け、新しい船を造ってメキシコに送り届けたのが切っ掛けで、仙台藩主伊達政宗が支倉常長以下百八十人の遣欧使節をメキシコ経由でヨーロッパへ送りました。

二〇〇三年秋に仙台・御宿とアカプルコの友好都市三十年の交流行事を取材し、「日墨交流四百年御宿・仙台とアカプルコ」を地元放送局の協力で放送しました。この取材中、仙台・御宿からメキシコに渡った日本人の中、スペインに二十人、メキシコには実に百二十人が取り残された事実を知りました。

スペインにはハボン姓を持つ日本人の子孫が八百四十人もいる事が知られています。メキシコでは全く消息が

掴めていませんでした。最近メキシコの歴史学者の研究によつて日本の明治時代に三十五年間も大統領を勤めたポリリオ・ディアスの母方の姓がPelomo Morisと言ひ、日本人の「森」さんの子孫である事が分かったのです。彼は日墨修好通商条約を結び、息子を日本大使にし、榎本開拓団を受け入れるなどした他、軍港マグダレナ湾の日本への割譲まで目論みました。ディアスは自分が日本人の子孫であることを知って親日的な政策を執り、地方領主カシケの統治に家康の幕藩体制を真似たとさえ歴史学者は言っています。真に興味深いメキシコ史の秘話を見つけました。

又日墨協会橋本会長、駐墨西村大使のご協力を得て「NHKのど自慢メキシコ」を実現させました。更に、放送局幹部三人をNHKの研修センターに送り込んだり、若手PD二人を「グループ放送研修」で日本に派遣し世界各地からの若者十五人と共に研修を受けてもらいました。JICAの制度をフルに活用し、メキシコの仲間に日本を学んで貰うことが出来た事を心から喜んでいきます。

個人的にはスキューバダイビングの免許を取つてカリブ海のサンゴ礁に潜り、水中写真を撮ったのも一生の思い出です。

パキスタンを垣間見る 木村亮彦（パキスタン）

パキスタン滞在中つれづれなるままに感じた事の一部分をご紹介します。

付合ひ方のアドバイス

パキスタンに長い日本の方の話の中で、現地での付合ひ方はねと、冗談を交えておっしゃったのが妙に印象深かった。それは忍耐の一字で次の五つの「ア」行を頭に入れておくと良いと云われた。
あてにしないこと
あせらないこと
あなどらないこと（誇りが高い）
あきらめないこと
最後に「あ・・・」となるようである、と。

約束事

約束事をする、最後に決まると彼等は、イン・シャール・アッラーと云う。アラーのお加護を持って。すっぽかされて怒ると、だからイン・シャール・アッラーと云ったでしょう。怒る方がよっぽど可笑しいと言つて叱られる。もし嘘つきなどと言おうものなら、世界でも誇り高い彼等は怒り狂い、仲



間に確実に云いふらし、もうこれを最後に彼等とは付き合いかねない。門戸は一切開かれぬ。

パキスタンでの交通事情

その国の交通事情は政治の仕組みを反映していると云われる。パキスタンのダウンタウンで交通事情の雑踏を見るのは偶にはそれなりに楽しいが政治の実態を垣間見ると納得する部分もある。人、ロバ、リキシャ（その排気ガスは空気を汚し、喉が痛くなる程である）、大型定期バス、乗合中型バス、乗用車、トラック、ラクダ、馬が混然として身動き出来ない状況に出会うことは頻繁で、カラチ、ラホール、ラワルピンディー、ペシャワールなど大きな都市程あらゆるものが混雑している状態は活気溢れる市民生活ではあるが、何とかならないものかと言う気にもなる。こうした状況は何十年前とそんなに変わっていないと言ふ。約束事を軽んずる習性もあるように思う。私は運転手付きのレンタカー（最新のホンダシビックで月額三万ルピー（約六万円）、別にガソリン代月額四千五百ルピー（約九千円））を使用していたが、常に予定の三十分前から四十五分前まで待つておかないと間に合わないのが常であり、それを恐縮するどころか意に介さない。蛙に水をかけるのに似て平然としたものである。姿を見て

早く、早くと手招いても、駆け足で歩くことはない。都会でも車線は守らない、信号無視（警官が立っていない）、と、割り込み、トラックの過積載、正に何でもありである。こうした雑踏の中で生きて行くたくましさはやがてしたたかさにも繋がって、民度となつていく。人よりも一歩でも前に出ないと永久に前に進めないし、生きる為にはルールは二の次、日本の戦後混乱期もこんな感じであったかと想うが、早く抜け出して欲しいものである。

アルゼンチン事情

恩返しは今

須郷隆雄（アルゼンチン）

ノーベル賞経済学者であるシモン・クズネツ博士の言葉によると「世界には四種類の国がある。先進国と後進国と日本とアルゼンチンだ。」ということだ。アルゼンチンのエコノミストたちにしばしば引用される警句である。

日本が資源小国でありながら資本主義的工業化に成功し、第二次世界大戦後世界随一の高度成長を遂げたのに対し、資源豊かなアルゼンチンは十九世紀末から第一次大戦にかけて一人当たり世界最高の経済成長率を実現しながら、新興工業国家として成功



せ、他の国々と比べて相対的に衰退していつたから

知られていないことだが、地球の正反対にあるアルゼンチンと日本は、歴史的に「先進国アルゼンチンと後進国日本」として深いかわりがあり、アルゼンチンが日本への援助国であった歴史がある。

一九〇〇年に於ける両国の一人当たりの実質GDPはアルゼンチンが二、七五六ドル、日本は一、一三五ドルであった。日露戦争の際にはアルゼンチンは日本へ軍艦を提供し、関東大震災の時にはいち早く支援物資を送ってくれたそう。また第二次大戦後の食糧難にあえぐ日本に真っ先に支援の手を差し伸べたのは、ミュージカルのエビータで有名なエバ・ペロンの財団であり、戦前から数多くの日本人移住者を受け入れたのもアルゼンチンであった。

しかしながら、この関係は一九六七年に逆転し、二〇〇二年の一人当たりGDPを一九〇〇年当時と比較すれば、アルゼンチンはわずか一・一倍、日本は二七・六倍となつた。アルゼンチンのみならず国際社会にも深刻な影響を及ぼ

している現在のアルゼンチンの経済危機は、一九九八年後半からとも深刻な状況に突入することとなった。貧困人口は都市人口の五十七％に達し、貧富の差は過去三十年間の統計でも最大になった。このため、貧しい北部の州では栄養失調で餓死する子供が出たことや、かつて南米のパリと言われたブエノス・アイレスでも、夕方になるとゴミを漁る人達で溢れたことが世界中で報道された。

かつて途上国リストからの卒業予定候補に挙げられたことが夢のようであり、国際社会からも支援を必要としている状況にある。戦後貧困のどん底に喘いでいた日本に地球の裏側から手を差し伸べてくれた友人アルゼンチンへ、六十年ぶりに恩返しをする絶好の機会が今なのかもしれない。

生きがいシニア海外

ボランテイア

平田輝雄（パラグアイ／パナマ）

歳を取っても健康であれば、まだまだと現役を続けるシニアや趣味、ボランテイアなどを始め様々な人生を求めて活動している元気なシニアを見てきました。

健康で元気なシニアは、若

さ溢れる青年と同様未来に夢と希望や開拓精神を發揮、新たな人生に挑戦したいと考えているシニアがたくさんいます。

終戦で全てを失った日本の経済成長を築き上げてきた元気なシニア仲間が全国津々浦々に数多く元気に暮らしています。

世界中の発展途上国では、日本が今日まで培ってきたノウハウや技術と経験を導入して、国づくりや発展を遂げたいと願う途上国や低開発国は東南アジアを始め、中南米、南米、アフリカ等に多数存在します。これらの国からは要請が後を絶たない。

こうした元気なシニア仲間は、現在様々な機会を模索しながら、自分の技術や経験をどう活かして、途上国の国づくりや協力することができるか夢と希望をもつてその機会を探し求めています。

千葉県は、関東で神奈川県に次ぐシニア海外ボランティア参加者が多い県として国内でボランティア活動に対する理解が高い地域社会と考えています。

OBとしてパラグアイ・パ



ナマでの海外ボランティアの経験を活かし、またシニア仲間

伝え、多くの元気で青年の様に情熱と希望に燃える物づくりに技術などを持った優れた人材能力者で、日本の国際協力シニアボランティアに挑戦する仲間のサポート役を果たして行きたいと考えています。

更には、シニアルネットワーク財団から委嘱された、シニアライフアドバイザーの役割を果たす意味でも、既に現実化した高齢化社会の中でシニアの社会的位置づけや新しい社会の暮らし方を前向きに改革する開拓者として、よりよき高齢化社会実現のために寄与したいと考えています。

元気で活力に満ちたシニアエネルギーは、豊富な人生経験や培った技術を国内でシニア人材能力を發揮して、国際社会では、国際協力、国際親善など国際貢献のために尽力するシニア人材活用の有効性を日本国民が認識することによって、団塊シニア新時代が社会活性化の契機となって元気な日本を再構築できるような希望を託して頑張りたいと思っています。

ブータン報告

林 敬三 (ブータン)

インドの北側に位置しネパールと並んでヒマラヤ山脈に貼り付けられたような山国

ブータンの首都で二年間ドックプリ異文化に浸かって来ました。

汚染された近代文明とは隔離され、三十年前迄は鎖国を続け、チベット仏教に育まれてきた心豊かな国。九十%以上の人が農業に依存し、一握りの都市生活者を除いてはまだ貨幣経済とは距離のある生活をしています。ブータンでは貧困ラインと言われている月収七百四十Nu(約二千円)以下の人が三十%以上いるようですが、教育費と医療費は無料ですから現在には貧しいなりに幸せな生活を営んでいるように思います。

しかし、世界に残された数少ないお伽噺のようなこの国が近代化の波に翻弄されかけている所を目的の当たりにし、この国の将来を考えると心痛むものがありました。東南アジアの他の途上国にも見られるように、急激な経済発展や都市化が生み出すバブルは多くの庶民にとって得るものが少なく貧富格差を拡大していくことは間違いありません。

私の仕事は、首都の市役所の環境部に派遣され激増する都市ゴミ



処理の対応を考える事で、JICAと現地のコカコーラの代理

店の協力を得てリサイクルリングヤード(取りあえず段ボールとPETボトルだけです)をスタートさせる事ができました。インド国境まで百七十五km、それから百三十kmをはるばるトラックで運んでインドでリサイクルしています。

他の途上国の人たちと同様にブータン人もゴミを散らかすことは平気です。

大臣やJICAの所長などの名士を主賓に招いて首都のモデル地区でクリーンアップ・キャンペーンを度々行いましたが、まだ顕著な効果が見られずブータン人の意識改革にはまだまだ時間がかかりそうです。

その間、私的なことですが千葉市緑区の「おゆみ野女性の会」の皆さんが送ってくれた千葉市の小学生が使った算数セットを首都の三つの小学校にお届けしブータンの教育現場にほんの少し触れることが出来ました。加えて千葉市の教育長のご協力で算数セットの先生の用紙のマニュアルを作ってもらい、現地では調整員・JOCMの方々にも手伝ってもらってその英語版を作ってワークショップを開催する等、別な形のボランティアができました。沢山の方の善意が繋がりに、綺麗に花が咲き大変いい思い出になりました。過ぎてしまえばアツと云う間の二年間だったように思います。

会員動静

定例会で紹介された新会員は次の十名の方々です。(敬称略)

- 田辺光宏
- メキシコ、放送番組制作、習志野市
- 片岡工
- ベトナム、経営指導、大網白里町
- 木内良郎
- マレーシア、溶接、茂原市
- 木村亮彦
- パキスタン、観光事業、千葉市
- 河合祥雄
- チニニア、総合地域開発計画、浦安市
- 小久保亮一
- ヨルダン、化学工業技術、千葉市
- 須郷隆雄
- アルゼンチン、経営指導、流山市
- 林 敬三
- ブータン、都市衛生、千葉市
- 平田輝雄
- パラグアイ/パナマ、電子技術、柏市
- 福井凱雄
- アルゼンチン、貿易振興、船橋市

十七年度秋派遣シニア海外ボランティアとして次の会員が出發されました。(敬称略)

- 菅井啓祐
- ドミニカ
- 小松秀世
- ボリビア
- 柏尾英彦
- サモア
- 加藤哲男
- ペルー

千葉県海外技術研修員受 入事業への協力活動

昨年度当会では千葉県総合企画部の要請で、七名の海外からの技術研修員に日本語指導や、技術研修の環境整備への助言、生活相談を引き受けました。初めての活動のため、当会役員(当時)で対応しました。

派遣国			研修分野、研修先	担当会員名
タイ	男性	25歳	機械設計、東洋エンジニアリング	堀端俊雄
タイ	女性	29歳	地震振動、産業支援技術研究所	寺戸康隆
タイ	女性	40歳	水産加工、(株)ニチレイフーズ	宮崎 泰
ミャンマー	男性	33歳	自然エネルギー、農業組合法人 和郷園	山本茂穂
ベトナム	女性	23歳	行政改革、千葉県総務部行政改革推進室	尾崎 進・後藤 優
ベトナム	男性	25歳	バイオマス、東京大学生産技術研究所	岩谷宏司
ブラジル	女性	25歳	小児看護、千葉県子供病院	市井博子

千葉県では今年度は九月下旬から十二月中旬に亘り四カ国から七名の研修員受入を実施されました。上表はその内容です。

当会に対して左表のような協力要請があり、マンツーマン担当者八名を派遣することとし、会員にお知らせしてボランティア協力者を募り、対応することにしました。

今回は時間的に余裕が少なく、電子メールのみで募集することになりました。ご了承ください。幸い多くの方からご応募があり、役員会で人選をさせていただきました。また、二名の日本語研修補助などは役員が担当しました。

生活面でのマンツーマンでのサポート、悩み相談など
研修先でのオリエンテーション、フォローアップの補助、通訳
日本語研修について千葉県講師に協力、補完
日本の生活文化、背景の学習への指導
空港送迎、研修先等への移動方法の指導・同行、その他

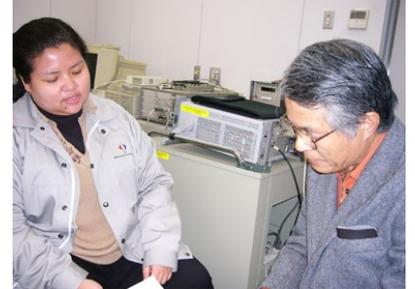
このように当会の協力のおかげ、海外諸国との友好関係強化に期待しております。
 (上田義晴・後藤優)



和郷園



東京大学生産技術研究所



千葉県産業支援技術研究所

写真提供
 (財)ちば国際コンベンション
 ビューロー 大瀧章祐氏

研修員をサポートして

寺戸康隆 (松戸市)

ここでは直接担当した会員の一人として、研修員の目線に立って感じられたことに触れてみたいと思います。

研修員はいずれも高学歴の大学あるいは政府機関に所属する二十三歳から四十歳(来日時)迄の人材で母国の発展を一途に背負って立つ精鋭揃いでした。それでも決して気負いはなく淡々として研修や学習にいそしむ姿が印象的でした。七人の研修分野は自然エネルギー、バイオマス、行革、地震・津波予報、看護などといった今日の世界に共通した課題を反映しています。

研修員のほとんどは日本が初めてで、共通して日本の先端技術のみならず文化・生活習慣にも強い関心を抱いていました。私は海外では日本の観光案内がステレオタイプの山・川・谷が少なからず定番であることを危惧していたので、日本の今日の姿を見せるのが先決だと感じていました。若い彼ら・彼女らには、既にインターネット等でそれなりに情報を得ており、これは杞憂のようでした。

研修期間中の休祭日を利用した県スタッフによる渋谷で

の能観劇や原宿・浅草散歩、日光ツアー、最後の京都・富士山オーバーナイトツアーなど、またシニアボランティア会員による鎌倉見物、千葉郊外「生命の森」紅葉狩り、松戸パンダイ・ミュージアム見学、浅草・上野・秋葉原散策など、また絆を深めたホームステイ、例えば、私のパートナーのベンジャウオンとホストファミリーとの間のタイ料理とたこ焼き・すし・おにぎりの手づくり交流、さらにまた各研修先主催の各種イベントやお別れパーティ等々、これらは日々のハードな研修に活力と潤いを与えると同時に日本を身近に知るチャンスとなったことでしょう。

ベンジャウオンを通じて今回の研修プログラムに対し研修員の皆さんがどんな感想をもったか聞き取りを頼んでいたところ、帰国直前に彼女から次のようなメールが返ってきました。「私たちは今回の千葉県海外研修プログラムに参加できて大変幸福です。誰もがこれまで知り得なかった多くの新しいことを修得しました。日本での経験は私たちの職務、ひいては母国にとって有益なものとなりましょう。それ以上に最も重要なことは両国間の親交の絆が深まったことです」。

「ボランティア家族連絡会」開催

平成十七年度千葉県ボランティア家族連絡会が十一月二十六日に千葉市「ぼるるプラザちば」で開催されました。

JICA東京国際センター、青年海外協力隊千葉県OB会と当会の共催で、青年海外協力隊／日系社会青年ボランティア三十六家族とシニア海外ボランティア六家族の参加を得ました。来賓として千葉県、青年海外協力協会、協力隊を育てる会からの出席があり、当会からは品川会長、梅谷副会長、後藤優幹事、山本茂穂幹事のほか、寺戸康隆会員(松戸市)が現地活動体験報告者として参加しました。



青木元大使のお話

大山千葉県国際協力推進員の司会で、主催者側挨拶当会は品川会長)、OBの現地活動体験報告の後、地域別にテーブルを囲み現地での生活・仕

事についての活発な懇談、質疑応答が行なわれ有意義な交流の場となりました。さらに青木元大使(育てる会理事)のお話もあって留守家族の方々は十分に納得して帰途につかれました。

シニア海外ボランティア体験&募集説明会参加

本年度のシニア海外ボランティアの募集説明会は例年同様、千葉市と船橋市で春、秋開催され、当会からパネリストおよび相談員として十名の会員が参加しました。各会場とも満員の盛況で世間の関心の高さがうかがわれました。

秋募集から参加者の多い船橋会場に相談員が配置され、質疑に個別に回答出来るようになり、一層応募者の便宜が図れるようになりました。

平成十七年春募集
千葉会場(四月十六日・千葉市千葉国際交流プラザ)
パネリスト・井川雅子会員(チュニジア、船橋市)・柏尾英彦会員(モロッコ、浦安市)
船橋会場(四月二十三日、船橋市中央公民館)
パネリスト・堀端俊雄会員(ラオス、我孫子市)・尾崎進会員(タイ、八千代市)

平成十七年度秋募集
船橋会場(十月二十二日・船橋市中央公民館)

パネリスト・有光武臣会員(ホンジュラス、八千代市)・北垣勝之会員(メキシコ/カンボジャ、白井市)
相談員・上村 實 会員(ザンビア、八千代市)・井川雅子会員(チュニジア、船橋市)
千葉会場(十一月五日・千葉市国際交流プラザ)
パネリスト・高木利公会員(ヨルダン、館山市)・斎藤富貴子会員(ブラジル/ニカラグア随伴、千葉市)

秋派遣S△県庁表敬訪問

春募集の結果、千葉県から合計十六名の方の秋派遣が決定されました。派遣前、A、Bの二グループに分かれ、十月三日と十一月一日に千葉県庁総合企画部を表敬訪問しました。当会からは役員が同席し、終了後には現地事情の説明と懇談の場を持ちました。

会員の現況

平成十八年二月現在、当会の会員数は六十八名です。赴任国は中南米、大洋州、アジア、中近東、アフリカと二十七八カ国に及び、地質・植物・電気・電子・機械・金属・設備保守・IT・品質管理・農業・貿易・観光・日本語教育・縫製・成人看護・放送番組制作・行政などの多岐に亘り、約五十の専門分野を網羅しています。

常夏の国

「ドミニカ共和国」

及川淳一(船橋市)

ドミニカ共和国は、カリブ海ではキューバ島につぐ大きな島「イスパニョーラ島」の東三分の二を占めている島国です。日本の九州に四国の半分を足したほどの国土に八百六十万人の人びとがスペイン文化の影響のもとに暮らしています。この国の海岸線はリゾート開発が進み、欧米人向けのリゾート・ホテルが連なっていて、気候が温暖なこともあり、年中、観光客で賑わっています。



首都のサント・ドミンゴはコロンブスの弟によって五百年前に建設された歴史のある街ですが、今では高層ビルが林立し、主な街路は立体高架化され、また主要な地方都市とは片側二車線の高速道路で結ばれています。

私の派遣先は、「農地庁」という政府機関です。日本政府が二〇〇〇年に無償資金協力により八億円あまりの建設機械を供与したので、それらの機械のメンテナンスの技術顧問として働いています。赴任当時は稼働している機材は皆無に近い状態で呆然としましたが、その後、JICAの支援や農地庁の自助努力もあって事態は徐々に改善されてきています。

農地庁はそれらの機材を稼働させて日本人移住地を含む広大な農地を管理しており、当国最大の農業生産団体となっています。主食のコメはもちろん、バナナ、パパイヤ、コーヒー、ココア、胡椒、豆類、牛肉、豚肉、鶏肉、酪農製品など多種多様な農畜産物を生産しています。

この国の中北部には、日本の円借款などの協力によって開発された大水田地帯が広がっています。背景に椰子の木がなければ、日本の水田地帯と錯覚するほどです。ここでは一年に二期作半の稲栽培が行われています。

私のホンジュラスに続く二度目の活動が、機材の整備技術の移転を通じてこの国の農業生産に貢献できると考えているところです。(二〇〇四年十月再赴任)

県下各地の国際交流・協力フェスティバルに参加

今年度も県下各地の国際交流・協力フェスティバルに当会ブースを設けJICAおよびシニアボランティアの理解促進に努めました。当会の会員多数が参加し、説明・相談にあたりました。各会場の設営、主催者側との調整など、大山千葉国際協力推進員が活躍されました。

浦安市と千葉市の各会場では、当会の「国際理解クイズ」が人気を博しました。

東葛飾地区「国際交流のつどい2005」

日時：十一月十三日(日)
場所：県立手賀の丘少年自然の家(柏市)



参加団体・我孫子、柏、流山、野田各市の各国際交流協会、当会

役員のほか、堀端俊雄、岩谷宏司、山野辺恭夫、武藤達雄各会員が参加しました。

浦安市国際交流・協力フェスティバル2006

日時：一月十五日(日)
場所：浦安市ショッピングプラザ新浦安

参加団体・ブース出展は浦安市国際交流協会など十七団体および写真展示に十四団体・学校が参加。



当日は松崎市長が当会ブースを訪問、激励をして戴きました。当会よりの参加者は役員と、宮崎 泰、市井博子各会員でした。

「ちば市国際ふれあいフェスティバル2006」

日時：一月二十九日(日)
場所：幕張メッセ国際会議場(千葉市)

参加団体：千葉市国際交流協会など三十六団体



来場者はシニア海外ボランティアへの関心が高く、多くの問い合わせがありました。役員のほか、内山初枝、黒田洋平、斎藤富貴子、増田定雄各会員の参加を得ました。

「ちば出前講座」で熱演

千葉市飯山満公民館主催の第十回飯山満寿大学にて「先人に学ぶ・シニア海外ボランティアの経験談を聞く」というテーマで、平成十八年二月十五日(水)に堀端俊雄会員(我孫子市)が講演を行いました。

地域の高齢者五十人を対象に堀端会員の派遣国ラオスの概要、参加動機、活動内容、現地事情、ボランティア活動から得たもの等についてスライドやビデオを用いて熱演が行なわれ聴衆の耳目を引きつけました。

CCB便り



千葉県では開発途上国の人材の育成を図るため、昭和五十七年より「海外技術研修員受入事業」を実施しています。これまでに二十九カ国から百十三名の研修員を受け入れました。

昨年度より千葉県JICAシニアボランティアの会から、皆様の豊富な知識と経験を活かし、研修員受入のお手伝いをして戴いております。

さらに千葉県国際交流センターとJICA共催の「ちば出前講座」担当として、地域に根付いた国際貢献を目指す皆さんとともに活動できることを、推進員としてとても嬉しく感じています。

JICAよりのお知らせ

JICA東京連携促進グループがJICA広尾へ移転します。

国際協力の窓口として、千葉県を管轄していたJICA東京連携促進グループが、平成十八年四月よりJICA広尾に移転し「JICA地球ひろば」として生まれ変わります。市民の皆様により開かれたJICAを目指し、国際協力に関する情報提供・相談などに対応してゆきますので、お気軽にお越しください。

(大山美砂子)

編集後記

本号は、定期的な記事のほか、千葉県海外技術研修員受入事業への協力活動記事の充実、海外便りの新設、旺盛な会員寄稿で、紙面をはみ出すほどの原稿が集まりました。

本誌は会員の皆様、JICA関係、千葉県庁関係にお届するほか、広く県下各機関にお配りしています。先日も最寄の施設にも本誌が展示されており、また編集子のところにもバックナンバーの請求などの連絡も参っております。

本会の活動が広く世間のご支持を一層受けるように、シニア海外ボランティア経験を地域社会・教育関係に活かしていただく場がさらに増えるように、と念じて居ります。

(黒田昭太郎)

お詫びと訂正

会報第三号七頁二段の会員講演記事の表右欄に掲載しました「大網白里町生涯学習課主催」は「大網白里町国際交流協会主催」の誤りでした。お詫びして訂正します。

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
04-7131-5830(黒田)
千葉県国際協力推進員
043-297-0245(大山)